

〔目的〕 ことわざは、江戸時代にまとめられたもので、当時の庶民の生活信条や、処世要領などの教訓的なものが主であった。その中には、日常使用する食材料の旬や扱い方、及び料理法などもあり、家庭料理の伝達法の一つとして、口伝えを中心に親から子へと伝えられてきた。そこで、それらを現在の女子短大生が、どのように受け止めているかについての意識調査を行い、併せて高齢者についても同様の調査を行ったので、その結果について報告する。

〔方法〕 1987年4月～7月に女子短大生（食物系476名，文科系54名）と老人大学の在籍者163名の異なる3グループを対象に、質問紙調査法による調査を行った。

内容は、ことわざに対する興味度や、伝承法，知名度，その他である。各項目について、3つの対象群間における違いを比較検討した。

〔結果〕 調査の項目に対して $\chi^2$ 検定を行った結果、興味度については、1%以下の危険率で有意差が認められた。しかし、ことわざが役立つかどうかについては、90%以上の者が役立つと思っており、対象群間には有意差は認められなかった。伝承法と知っていることわざの種類については、短大生と高齢者の間には差が見られるが、食物系と文科系においてはほぼ同じ傾向であった。提示した10種のことわざの知名度については、対象群間に差があるように思われる。